

# 広島市立大学学術リポジトリ

## 中国の青少年を対象とした疎外感に関する尺度の開発と発達的な研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 東, 吉, 沅洪, YANG, Dong, Ji, Yuanhong メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://hiroshima-cu.repo.nii.ac.jp/records/260">https://hiroshima-cu.repo.nii.ac.jp/records/260</a>

## 中国の青少年を対象とした疎外感に関する尺度の開発と発達的な研究

楊 東 吉 沅 洪

## Research on Scale and Development of Adolescent Students' Alienation in China

Dong ANG Yuanhong JI

In this research, a hypothesis about the theoretical structure of alienation is established on the basis of literature study and questionnaire results: according to the hypothesis, the scale of alienation is constructed. Analyzing the exploratory and confirmatory factors, the validity and the reliability of the scale revealed the following results: ① Alienation is a multi-hierarchical and multi-dimensional system which has two hierarchies and nine dimensions. ② The theoretical system of the alienation constructed in this research proves reasonable, and the scale is found to be reliable and valid enough. ③ Then sense of social alienation, sense of interpersonal alienation and overall sense of alienation mainly differ in the interaction between grades and areas, but the sense of environment alienation has obvious differences in the interaction between genders and regions. And the differences of the overall sense of alienation can be seen in the interaction between grades and regions.

- |             |                |
|-------------|----------------|
| I はじめに      | 1. 因子分析        |
| II 目的       | 2. 尺度の信頼性      |
| III 研究方法    | 3. 尺度の妥当性      |
| 1. 予備調査     | 4. 青少年の疎外感     |
| 2. 本調査      | V 調査結果とその分析の検討 |
| IV 調査結果及び考察 | VI まとめと今後の課題   |

## I はじめに

我々の日常生活の中で、疎外感とは人間関係において生じる疎遠、あるいは不協和として理解されているが、心理学の研究における定義はもう少し複雑である。疎外感とは、主に我々と周囲の人間、物事との関係において生じる疎遠から生まれる消極的な

感情であると言える。

欧米と日本では、疎外感に関する研究が多く行われている。まず、米国においては、疎外感、及びその下位概念について多くの尺度が開発されている。これらの研究は主に以下の六つの領域を占めている。①疎外感と犯罪を含める問題行為に関する研究。たとえば、Schubert & Wagner (1975) と Wolfe (1976) は疎外感と問題行動との相関関係を見いだ

し、つまり青少年における疎外感が高ければ高いほど、問題行動も増えるという傾向を指摘している。また、Wozniak (2000) は、疎外感と犯罪行動の関連について研究を行っている。その研究において、Wozniakは、Fromm.Eが提唱している社会疎外理論と犯罪行為の関連を明らかにし、Fromm.Eの理論は犯罪行為を理解する、そして犯罪行為に対して適切な政策を作るのに有効な理論として評価するとともに、さらに合理的な提案を行っている。②疎外感とアルコール依存、及び薬物乱用との関係に関する研究。Thomas & Schare (2000) は、アルコール依存と社会疎外感について異文化間の比較分析を行っている。彼らの研究によって、アルコール依存患者は一般人に比べ比較的高い疎外感を持っていること、例えば、パナマ人のアルコール依存患者はアメリカ人より高い疎外感を持っていること、そして両者の間には強い交互作用があることも明らかになった。また、Boyd & Mackey (2000) も社会心理学の視点からアルコール依存女性における疎外感の出現について検討している。③疎外感と心理健康、及び心理臨床治療の関係に関する研究。これについては、DeNiro (1995) は後天精神分裂症(統合失調症)の患者が持つ疎外感に関する研究が、その例として挙げられる。④疎外感と家庭、隣人との関係に関する研究。例えば、Warshak (2000) は再婚後に両親疎外感症候群 (parental alienation syndrome) が起こることに関して調査研究を行った。それによると再婚によって作られる家庭に上手に適応できないために、新しい両親に対する疎外感、継母、あるいは継父と子どもとの間における衝突から生じることが多いのである。⑥政治上の疎外感に関する研究。これについてはSouthwell & Everest (1998) が行った、政治世界で青年及び中年の疎外感が選挙に及ぼす影響に関する研究が例として挙げられる。

次に、日本における疎外感研究の現状を見ておこう。日本において、宮下・小林 (1981, 1985) を中心とする研究者たちは疎外感の発達及び変化について多くの研究を行ってきた。彼らは疎外感に関する尺度を作成したばかりでなく、青少年期における疎外感の発達を調査研究したり、一般児童と問題行動を起している児童を対象とする比較研究を行ったりしている。また、彼らは両親の養育態度、家庭環境、さらには過去・未来の自我について抱く観念に基づいた疎外感について研究をしている。結果としては、疎外感が高い人は家庭環境や自我に対して消極的な認識と態度を持っていることが明らかになっ

た。この結果はRode (1971) とPaulson (1972) の研究結果とも一致している。また宮下は (1994) 問題行動の種類、問題行動の発展と疎外感との関連、そして疎外感と自我の発達ならびに精神健康との関係について研究を行っている。その結果から、疎外感の高い人において、疎外感が高いことを受け入れることができる人はできない人より、より高い人格の成長が見られることが明らかになった。この研究における人格の成長というのは自我発達、自己実現、自我同一性の達成、創造性人格の形成などを意味する。さらに宮下は(1994)、疎外感と価値観との関係について研究を行い、疎外感と物質を重視する価値観との間に正の相関、対人関係を重視する価値観との間に負の相関、環境を重視する価値観との間に負の相関が見られている。それ以外に、伊藤ら(1999) は、既婚者の疎外感が夫婦関係と社会活動に及ぼす影響に関する研究を行っている。

さらに中国における疎外感に関する研究を見てみよう。楊・呉 (1998, 2002) は疎外感の定義と疎外感尺度の理論構造について分析を行っている。中国において一般的な疎外感の定義は、主に疎外感の「異化」の意味のみに着目しているばかりでなく、社会疎外感の解釈に偏っていることが明らかになった。従って、主体は、発達の過程において自分の活動から分離していった客体が、主体と少しずつ疎遠している中で、外在的な、主体と異なる力となって主体に対立するのに直面する。楊・呉は、張春興(1989) によって行われた疎外感の定義、及び理論構造という視点から作成した尺度を用いて、大学生の疎外感の状況、価値観との関係について調査研究を行った。この研究によって、疎外感は複数の下位概念によって構成されていることが明らかになった。ただし、この研究も、張春興の疎外感に関する定義とその理論と同じく社会的疎外感に偏っており、主に疎外感の「異化」の意味を論じており、疎外感が持つ本来の限定が欠如していることが分かった。このような状況を踏まえ、我々は本研究を通して新たに疎外感の理論、及び尺度を作成することを試みる。

本研究では、疎外感を人間個体と周囲、社会、自然、及び自己との関係性において、正常な関係からの乖離、例えば一方的な支配が生じたために、個体のうちに社会孤立感、無力感、圧迫感、拘束感などの消極的感情が出現する状態と定義する。ここでは、疎外感は2つの意味を持っている。1つは疎外感を持っている本来の意味であり、つまり主体と客体との間に起こる乖離と不協和から生まれる消極的

な感情を指す。もう1つは疎外感が発展し、転化した後の意味であり、転化、異化、分離、他の力動によって支配、コントロールされることから生じる客体との疎遠、脱却と不協和である。この疎外感に関する定義は、アメリカおよび日本で定義された疎外感の内容とかなり異なっている。アメリカ、および日本で行われている研究は、消極的な感情の分類という視点から定義しているが、本研究は主体と客体との関係の違いによって、異なる消極的な感情が生まれるという角度から定義しているのである。従って、本研究によってなされた疎外感の定義は、比較的系統的に、全面的に疎外感という概念の本源を表現していると言えよう。

楊・張(2000)は、大学生を対象に疎外感と価値観との関係について調査研究を行っている。それによると、自我疎外感の高い者は物質、名利を重視する価値観を持っており、無力感の高い者は物質、名利を重視しない価値観を持っている。このことから明らかになるのは、疎外感と、個人の幸福、社会の発展、自然保護、及び人間関係の調和を重視する価値観との間に、負の相関関係があることである。また、 $t$ 検定によって、疎外感の高い者と低い者との間に、個人の幸福、自然保護、社会の発展、人間関係の調和を重視する面において著しい差異があることが指摘されている。この結果は、宮下(1994)の研究結果と一致するものである。

以上述べたことから、疎外感の研究について以下の問題が存在していると思われる。①疎外感に関する研究は欧米、日本の研究者によって行われている。調査対象は欧米人と日本人であるため、疎外感の尺度も当然欧米人と日本人を中心に開発されている。従って、その研究結果は必ずしも中国の文化に適しているとは言えない。特に、現代中国では、経済及び科学技術の急速な発展や、社会の激しい変動によって、物質的に豊かになるばかりでなく、社会的な競争も熾烈化し、人間と自然の乖離などが進んでいる。これらは疎外感を抱きやすい社会環境を広げるものである。また、中国政府はこのような社会と文化を背景に、「西部大開発」という政策を登場させたため、中国西部に目まぐるしい変化と成長が見られるようになった。社会を背景とする疎外感が研究されているため、中国特有の政治、及び文化を背景とする疎外感に関する研究を行うことが大切である。②疎外感の定義が多様であり、多くの研究者は疎外感の一側面、あるいは一つの下位概念しか考慮しておらず、疎外感に関する下位概念を全て包括す

る理論構造がまだ開発されていない。また、疎外感における「異化」は哲学の「異化」とどのように異なっているのか。心理学における疎外感の概念と理論は、社会学、哲学と政治学における疎外感とどのように異なっているのか。このような問題は今まで研究の中で深く探求されておらず、疎外感の概念と理論自体も社会学から借用してきたもので、心理学という視点から深く分析、理論構築を行っていない。従って、心理学の視点から疎外感について定義し、理論構築を行い、そして高い信頼性と妥当性を持っている尺度を開発することは必要である。③今までの研究の中で、発達の視点から青少年の疎外感に関する研究は少ない。心理学で取り扱う発達に関する研究は、大きく2種類に分けられる。1つは横断的な研究で、違う年齢層の人、あるいは集団を調査対象として行うものであり、もう1つは縦断的な研究で、同じ人、あるいは集団を調査対象として行う。本研究の調査対象となる青少年は、中学1年生から大学4年生までを含み、横断的な研究として発達を考察していく。青少年は自分の欲求について強く意識しているため、その欲求が社会、学校、家庭及び他人に阻害された場合には、不満な情緒と内心の矛盾が生じやすいのである。したがって、青少年が持つ疎外感に関する研究は大変重要な理論と現実的な意義を持っているといえよう。

## II 目的

現在、中国政府は「西部大開発」という政策を登場させた、中国西部に目まぐるしい変化と成長が見られるようになった。本研究は、日進月歩に変化を成し遂げている中国西部の青少年が持つ疎外感の実際について検討する。具体的な目的は、以下の3点である。

1. 心理学の視点から疎外感という概念について整理を行う。中国の文化と社会の発展を背景にし、先行研究に基づきながら疎外感について新たに定義をする。
2. 疎外感の定義に基づき、青少年の疎外感に関する理論モデルを構築することを試み、尺度を作成する。
3. 中国西部の青少年を対象に調査を行い、彼らが持つ疎外感の特徴とその発達状況を明らかにする。

### Ⅲ 研究方法

本研究の調査結果および構築する理論は、より中国の社会と文化に適合させるために、本調査に用いる尺度は外国のものを翻訳して使用せず、中国語オリジナルのものを開発することにする。本研究の予備調査、本調査の調査対象は全て中国人であり、尺度の項目も予備調査によって集められているため、本調査によって明らかにしたものは中国の社会と文化を忠実に反映していると言える。

#### 1. 予備調査

予備調査は本研究によって定義された疎外感の内容に基づき、先行研究を参考にしながら、項目を編成した。心理学の教授1名によって検討され、最終的に自由記述の形式をとった。

予備調査は、2000年3月に行った。本研究が定義した疎外感に基づき、まず青少年の疎外感について自由記述形式の調査を教師ならびに生徒を対象に行った。自由記述の調査結果について分析を行い、典型的かつ普遍的な項目を選択すると同時に、先行研究が作成した尺度を参照しながら、青少年疎外感尺度の予備調査項目を選定した。

尺度を青少年に分かりやすくするために、まず6名の心理学研究者が本尺度について検討を行い、56項目からなる尺度を作成した。次に、A高等学校とB大学の学生を対象に予備調査を行い、有効回答者数は165名(男子93名、女子72名)であった。さらに、調査協力者にインタビューをし、項目の内容を大きく変えない条件で、表現が曖昧である、分かりにくい、及び疑問に感じる項目を指摘してもらい、それらの修正、あるいは削除を行った。その後予備調査の結果について分析を行い、因子分析、相関分析、平均値、及び標準偏差を統計処理をした。その結果、因子負荷量の低いもの(<0.40)、共通性の低いもの、そして尺度全体との相関が低いもの(<0.35)が合計10項目削除された。以上のような検討を経て、46項目が残され、青少年疎外感尺度の構成項目となった。また、尺度の信頼度を高めるために、ライスケール合計6項目を付け加え、無効回答を識別する基準とする。従って、合計52項目からなる青少年疎外感尺度を作成した。

#### 2. 本調査

##### ①調査対象

中国西南、及び西北の生徒、学生を対象に調査を2000年5月において行った。調査対象となった青少

年には中学校1年生から大学4年生までが含まれている。中学校1年生から3年生まではそれぞれ141名、122名、138名であり、高校1年生から3年生はそれぞれ178名、182名、131名であり、大学1年生から4年生はそれぞれ175名、163名、170名、105名であった。合計1505名であり、各学年の男女比率はほぼ半々である。

##### ②調査方法

中国西部の青少年を対象に集団法で行った。本研究によって作成した青少年疎外感尺度信頼性と妥当性を確認するために、UCLA孤独感尺度とJessor.R & Jessor.Sの疎外感尺度を同時に調査に使用した。

##### ③調査用紙の構成

###### A. UCLA孤独感尺度(第3版、1988)

UCLA孤独感尺度(Russell & Cutrona, 1988)を疎外感尺度と一緒に、調査用紙を作成した。UCLA孤独感尺度は情緒を測る尺度であり、良好な信頼性と妥当性を持っている。例えば、信頼性係数は0.90前後を保っている(汪向東, 1999)。

###### B. 疎外感尺度(Jessor.R & Jessor.S, 1977)

Jessor.R & Jessor.Sによって作成された疎外感尺度は主に人間関係疎外感、と人間個体が参加する活動に対する不確定感を測定する尺度である。この尺度も良好な信頼性と妥当性を持っている(汪向東, 1999)。

###### C. 青少年疎外感尺度

予備調査によって作成された青少年疎外感尺度を用いた。

##### ④統計処理

調査で得られたデータはSPSS 8.0とLisrel8.3によって統計処理が行われる。

### Ⅳ 調査結果及び考察

#### 1. 因子分析

まず予備調査における疎外感尺度の結果を主因子法による因子分析を行った。結果は表1にまとめている。

表1から分かるように、この9因子構造の累積寄与率は50.31%であった。第1因子は、主に個体が信念、あるいは方向性をもっておらず、自分の存在に意義を感じないという内容であるため、「無意義感」と命名する。第2因子は、個体が自分を肯定的に評価できず、自己嫌悪を感じているという内容であるため、「自我疎外感」と命名する。第3因子は、個体

と親密な関係者との関係から生まれる疎外感という内容であるため、「孤独感」と命名する。第4因子は、主に個体が自然との関係から生まれる疎外感という内容であるため、「自然疎外感」と命名する。第5因子は、個体と自分の身内のような人々との関係から生まれる疎外感という内容であるため、「身内疎外感」と命名する。第6因子は、個体と生活してい

る環境との関係から生まれる疎外感という内容であるため、「生活環境疎外感」と命名する。第7因子は、高度な学習、及び仕事のプレッシャーから生じる圧迫感という内容であるため、「圧迫拘束感」と命名する。第8因子は、個体が自ら関与しており、相互作用のうちにある社会環境に対して影響力を持っていないと感じているという内容であるため、「無力感」

表1 疎外感の予備調査の因子分析結果表 (N=97)

項目	因子									h <sup>2</sup>
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8	因子9	
6	0.42									0.46
11	0.41									0.58
16	0.44									0.52
40	0.48									0.57
43	0.33									0.42
50	0.42									0.44
7		0.41								0.54
14		0.58								0.68
20		0.47								0.64
25		0.59								0.76
34		0.59								0.74
41		0.54								0.36
1			0.44							0.51
15			0.44							0.59
18			0.54							0.70
24			0.47							0.47
28			0.52							0.58
33			0.45							0.61
36			0.56							0.54
3				0.64						0.78
9				0.64						0.77
23				0.60						0.71
39				0.43						0.43
22					0.57					0.70
48					0.64					0.78
51					0.36					0.40
52					0.54					0.70
42						0.45				0.51
46						0.42				0.61
49						0.55				0.66
2							0.57			0.61
19							0.50			0.59
27							0.48			0.60
30							0.63			0.59
35							0.56			0.72
44							0.57			0.70
21								0.38		0.59
29								0.47		0.54
31								0.55		0.57
32								0.42		0.53
37								0.49		0.51
38								0.58		0.73
4									0.48	0.46
5									0.52	0.54
10									0.48	0.49
26									0.53	0.67
2乗和	4.47	3.69	4.36	4.06	4.11	2.48	4.72	4.77	2.73	
寄与率	9.7%	9.0%	6.7%	5.1%	4.5%	4.4%	3.8%	3.7%	3.3%	50.31%

と命名する。第9因子は、個体が他人、集団、及び社会との間に頻繁な接触を持っていないという感情であるため、「社会孤立感」と命名する。

本研究の仮説、つまり疎外感とは多次元な概念であるため、表1にまとめている疎外感尺度の因子分析結果に基づいて二次因子分析を行った。結果は表2にまとめている。

表2から分かるように、この3因子構造の累積寄与率は67.62%であった。第1因子には無意義感、自我疎外感、圧迫拘束感、無力感が含まれており、主に個体と社会（精神文化の側面）の相互作用において現れる疎外感であるため、「社会疎外感」と命名する。第2因子には孤独感、身内疎外感、社会孤立感が含まれており、主に個体と他人（感情の側面）の相互作用において現れる疎外感であるため、「人間関係疎外感」と命名する。第3因子には自然疎外感、生活環境疎外感が含まれており、主に個体が生活している自然、物理的な空間（物質の側面）において現れる疎外感であるため、「環境疎外感」と命名する。

## 2. 尺度の信頼性

本研究は3対のライスケールを用いて調査対象の回答態度を検討する。2対以上の項目が一致していない回答は、分析対象から外すことにした。従って、本研究の調査処理対象となった回答には信頼性があると言えよう。

本研究は3つの指標を用いて疎外感の信頼性について検討した。その結果は、表3にまとめた通りである。方法として再テスト法(2ヶ月後)、折半法を用いた。また、疎外感尺度全体及び各因子について $\alpha$ 係数を求めたところ、尺度全体0.92、社会疎外感因子は0.87、人間関係疎外感因子は0.84、環境疎外感0.71であり、信頼性が確認された。

また、本研究は合計1505名学生を調査対象に、Jessor.R & Jessor.S (1977)によって開発された疎外感尺度、及びRussell & Cutrona (1988)のUCLA孤独感尺度第3版と一緒に調査を行い、疎外感尺度の信頼性を確認した。結果は表4にまとめている。

表4から分かるように、Jessor孤独感尺度は本研究によって作成された青少年疎外感尺度の孤独感因子、人間関係疎外感因子との間に、高い程度の相関

表2 疎外感の第2因子分析の結果

因子	因子 負 荷			h <sup>2</sup>
	因子1	因子2	因子3	
F 1 無意義感	0.70			0.72
F 2 自我疎外感	0.68			0.76
F 7 圧迫拘束感	0.64			0.58
F 8 無力感	0.75			0.82
F 3 孤独感		0.66		0.58
F 5 身内疎外感		0.62		0.73
F 9 社会孤立感		0.72		0.76
F 4 自然疎外感			0.62	0.62
F 6 生活環境疎外感			0.71	0.83
2乗和	2.59	1.99	1.50	
寄与率	28.8%	22.1%	16.7%	67.6%

表3 疎外感尺度の信頼性係数一覧表

因子	項目と尺度の		同質性		
	相関係数		(Cronbach $\alpha$ 係数)	再テスト法	折半法
社会疎外感	.30**	... .63**	.87	.44**	.87**
人間関係疎外感	.41**	... .63**	.84	.39**	.83**
環境疎外感	.36**	... .68**	.71	.43**	.67**
疎外感尺度全体	.25**	... .66**	.92	.47**	.89**

表4 疎外感尺度とUCLA孤独感尺度、及びJessor疎外感尺度との相関

	E1	E2	E3	E4	E5	E6	E7	E8	E9	EE1	EE2	EE3	EEE
孤独感	47**	39**	73**	40**	42**	31*	45**	43**	49**	54**	73**	45**	69**
被験者数	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81
疎外感	52**	42**	58**	38**	48**	15	61**	44**	51**	63**	63**	36*	68**
被験者数	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43

\*p &lt; 0.05 \*\* p &lt; 0.01

注：E1：無意義感，E2：自我疎外感，E3：孤独感，E4：自然疎外感，E5：身内疎外感，E6：生活環境疎外感，E7：圧迫拘束感，E8：無力感，E9：社会孤立感，EE1：社会疎外感，EE2：人間関係疎外感，EE3：生活環境疎外感，EEE：疎外感尺度全体。

が見られているが、他の因子との間にも中程度の相関が見られている。また、Jessor孤独感尺度は生活環境疎外感因子との間に、弱い相関が見られている。

### 3. 尺度の妥当性

本研究は内容妥当性、構想妥当性という2つの指標を用いて疎外感の妥当性について検討した。

#### ①尺度の内容妥当性

本研究が用いている疎外感尺度は先行研究、及び自由記述形式の予備調査による結果に基づいて作成されており、調査対象となる学生、及び教師に個別インタビューを行って意見を聞いた他に、心理学研究者に検討してもらった。また、本調査に使用する前に、予備調査を行い、その結果も専門家によって

何度も検討してもらったのである。従って、疎外感尺度は高い内容的妥当性を持っていると言えよう。

#### ②尺度の構想妥当性

本研究はCFA分析(CFA, confirmatory factor analysis)を用いてEFA分析(EFA, exploratory factor analysis)によって抽出した因子構造を検証し、cross-validationを行った。CFA分析指数から見て、本尺度は良好な構想妥当性を持っていることが明らかになった。

### 4. 青少年の疎外感

#### ①青少年疎外感尺度の平均値と標準偏差

疎外感尺度、及び各因子の平均値、標準偏差を表6にまとめた。

表5 CFA分析指数

モデル	CFA 分析 指数									
	$X^2$	df	$X^2/df$	GFI	AGFI	RMR	NFI	NNFI	CFI	IFI
SLG9	180.64	892	2.02	0.73	0.70	0.19	0.61	0.72	0.74	0.74
SLG93	114.73	24	4.87	0.94	0.90	0.05	0.93	0.92	0.95	0.95
SLG92	93.03	26	3.57	0.91	0.85	0.06	0.89	0.89	0.92	0.92
SLG10	1757.4	928	1.89	0.74	0.70	0.15	0.63	0.75	0.77	0.77
SLG103	107.51	32	3.35	0.91	0.85	0.05	0.88	0.88	0.91	0.92
SLG102	163.20	34	4.8	0.87	0.79	0.07	0.83	0.82	0.86	0.86

表6 疎外感尺度、及び各因子の平均値と標準偏差

		無意義	自我疎外	孤独感	自然疎外	身内疎外	生活環境	圧迫拘束	無力	社会孤立	社会疎外	人間関係	環境疎外	疎外感
全体	M	3.98	3.08	3.36	3.69	2.80	4.19	4.24	3.72	3.20	3.76	3.17	3.91	3.59
	S D	1.19	1.19	1.14	1.37	1.26	1.34	1.26	1.21	1.26	0.96	0.97	1.15	0.84
男	M	4.04	3.04	3.35	3.84	2.84	4.25	4.31	3.74	3.25	3.78	3.19	4.02	3.62
	S D	1.20	1.18	1.13	1.38	1.27	1.34	1.27	1.21	1.25	0.96	0.97	1.17	0.84
女	M	3.93	3.12	3.37	3.55	2.76	4.16	4.19	3.71	3.13	3.74	3.14	3.81	3.55
	S D	1.20	1.20	1.17	1.34	1.27	1.33	1.27	1.22	1.28	0.98	0.97	1.12	0.84



## ②青少年の疎外感に関する分散分析

中国の都市と農村は、経済的な面においては格段な差が存在していることは周知のことである。従って、調査対象となった生徒たちが生活している地区は村であるか、町であるか、それとも市であるかによって、彼らが持っている疎外感とその発達は違っていると考えられる。ここで、疎外感尺度の結果を学年（中学校1年生から大学4年生まで）、性別（男女）、地域（西南、西北）、地区の種別（村、町、市）の差異を検討するため、学年、性別、地域、地区を4要因とする分散分析を行った。その結果を表7と表8にまとめた。

4要因の分散分析に有意な相互作用は見られなかったため、表から省略した。総合的に見ると、疎外感尺度全体では学年別、性別、地区別、地域別の2要因において相互作用が認められなかった。また、学年別、性別、地域別の3要因においても相互作用が認められなかった。さら、学年別、性別、地区別、地域別の4要因においても相互作用が見られなかった。

しかし、各因子から詳しく検討すると、学年別、地区別、地域別において所々有意な交互作用が見られている。

## ③青少年疎外感の発達状況

表7 疎外感尺度得点の分散分析表

	学級	性別	地区	地域	学級×性別	学級×地区	性別×地域	地区×地域	学級×性別×地区	性別×地区×地域
無意義感	1.67	1.33	1.09	15.97**	0.88	0.42	0.83	1.15	0.88	0.58
自我疎外	1.58	1.83	1.58	4.42*	1.07	1.86*	0.80	0.31	0.94	0.19
孤独	2.98**	0.73	0.07	2.29	0.43	1.27	0.40	0.04	1.72*	0.32
自然疎外	3.44**	1.63	1.66	1.63	0.91	1.59	12.83**	0.02	1.81*	2.67
身内疎外	2.23*	0.29	2.04	11.31**	2.45**	2.41**	0.13	2.16	1.74*	0.22
生活環境	0.29	0.04	1.24	25.55**	1.09	2.31	0.72	1.42	1.41	3.15*
圧迫拘束	1.58	0.71	4.02*	7.76**	1.36	1.66*	2.45	3.13*	1.27	1.57
無力感	0.66	0.57	2.46	9.05**	0.89	1.78*	1.56	0.38	0.93	0.91
社会孤立	2.43*	0.00	1.69	8.56**	0.98	1.67*	0.54	0.48	1.53	1.74
社会疎外	0.57	0.20	2.11	17.68**	0.97	1.64*	2.13	0.89	1.09	1.04
人間関係	2.18*	0.08	0.92	0.94	0.59	1.73*	0.51	0.36	0.94*	0.26
環境疎外	1.85	0.57	1.73	11.27**	1.15	1.18	8.03**	0.45	1.69*	3.24*
疎外感	1.38	0.10	0.81	2.11	0.66	1.63*	2.93	0.59	1.64*	1.34

×：交互作用，\*P < .05；\*\* P < .01

表8 疎外感尺度の平均値の得点表

	学 年			性 別		地 域		地区の種別		
	中学生	高校生	大学生	男	女	西南	西北	村	町	市
無意義感	22.59	24.03	24.80	23.59	24.27	25.64	22.87	24.11	23.57	24.41
自我疎外	17.95	18.86	18.62	18.75	18.27	18.55	19.01	19.04	17.83	18.74
孤独	21.38	24.09	24.56	23.62	23.47	22.34	24.17	24.05	22.77	24.21
自然疎外	13.99	15.10	15.09	14.22	15.38	14.19	14.28	14.24	15.23	15.18
身内疎外	11.18	12.25	10.39	11.04	11.38	10.03	11.39	11.11	11.58	10.81
生活環境	12.36	12.92	12.46	12.48	12.76	10.87	12.46	12.83	12.66	12.32
圧迫拘束	24.96	25.85	25.57	25.16	25.88	27.85	24.09	25.44	25.82	25.18
無力感	21.94	22.58	22.50	22.28	22.49	23.57	22.09	22.97	22.60	21.69
社会孤立	11.85	12.83	13.46	12.52	13.01	14.29	12.18	12.48	12.76	13.35
社会疎外	87.45	91.34	91.50	89.79	90.93	95.60	88.05	91.58	88.93	90.94
人間関係	44.42	49.18	48.42	47.19	47.87	46.65	47.75	47.60	47.10	48.30
環境疎外	26.35	28.02	27.56	26.71	28.15	25.06	26.74	27.00	27.80	27.50
疎外感	158.2	168.5	167.4	163.7	166.9	167.2	162.5	166.3	163.9	166.7

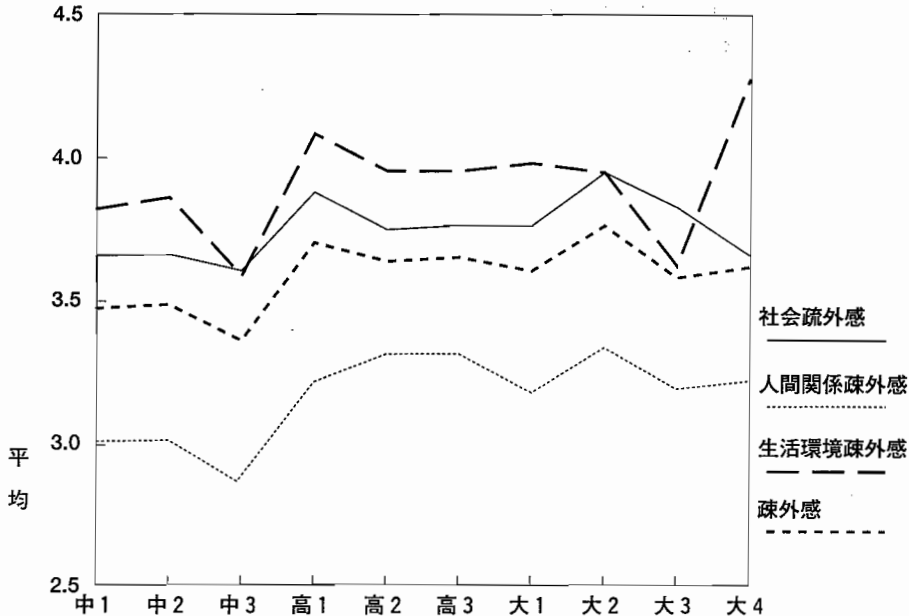


図1 青少年疎外感の発達状況

中国青少年が持つ疎外感の発達状況について検討するために、青少年の学年を横軸、疎外感尺度及び各因子の平均値を縦軸とし、疎外感尺度と各因子の得点において学年が高くなるにつれての変化状況を考察した。その結果を図1にまとめた。

図1から、青少年疎外感尺度全体及び各因子の得点は同じような形で変化していることが明らかになった。概ね三段階に分けられ、第1段階は中学1年生から3年生まで、第2段階は中学3年生から高校3年生まで、第3段階は高校3年生から大学4年生までである。第1段階においては、疎外感尺度の得点は大きな変化がなく、穏やかである。第2段階においては、一旦高くなるが、また低く変化する。高校1年生から2年生にかけて、最高な得点を表している。第3段階においては、第2段階と同じく一旦高くなってまた下がるが、大学2年生は最も高い得点を得られている。ここで注意すべき点としては、環境疎外感は大3年生において突然下がるが、4年生になってまた急に上がって最高得点を記録する現象が見られている。

## V 調査結果とその分析の検討

文化と社会構造がそれぞれ違っているため、疎外感の出現様式、及び疎外感が生じる原因も地域ごとにそれぞれ違って当然である。アメリカにおいて

は、疎外感を持っている青年は少年犯罪者、反社会的な行動を取る者、家出をする者などとして描かれていることが多く、疎外感が持たれてしまう根本的な原因は、社会が青年を理解しておらず、彼らのニーズに適切に対応していないからである(張進輔・張慶林, 1988)。また、日本においては、社会の激しい競争が人々を疲労させ、他人、及び社会に目を向ける余裕を持っていないため、疎外感が生まれていると考えられている(宮下, 1994)。中国人は人情を重んじており、妥協しやすく中庸を人生哲学とし、謙虚で今の状況に満足しやすく、文化と伝統は西洋、及び日本と大きく異なっている。また、中国社会は巨大な変化を遂げようとしている時期にあり、中国文化、伝統、及び社会背景に相応しい青少年疎外感尺度を作成することが大変必要である。

疎外感尺度は今まで多く開発されている。だが、疎外感に関する定義、あるいは疎外感の下位概念の差異から、それらの尺度はそれぞれ違う特色を持っており、多くのものは疎外感の一側面しか測定していないのであるとSouthwell (1992)は指摘している。従って、中国文化と社会背景に適合する疎外感尺度を作成するためには、まず疎外感を定義しなくてはならない。疎外感に関する定義、及び理論構造が比較的正確、かつ包括的なものになって初めて、中国青少年を対象とした、妥当性と信頼性が高い疎外感尺度の開発がようやく可能となる。本研究は先

行研究を参考に、心理学の視点から疎外感について定義を行った。この定義は先行研究と比較すると、疎外感が持つ本来の意義から外れておらず、より体系的なものになったと言える。まず、この定義に従って自由記述による調査を行った他、インタビュー調査も加えて、専門家の検討によって疎外感の理論仮説を立てた。次に、疎外感の理論仮説に基づいて青少年の疎外感尺度を作成した後、予備調査を行った。予備調査の結果について分析、及び修正を行い、本調査に用いる尺度を開発した。それゆえ、本研究が提唱した疎外感の定義と理論仮説は実際の中国青少年に適合しており、客観性を持っているものと言えよう。踏まえてきた手続きと構想については、正確で、客観的、合理的であると考えられるため、実証的な結論が導かれるだろう。

疎外感尺度の信頼性について、表3の結果から、尺度全体と各因子との相関係数、重複相関係数、折半相関係数は全般的に高いことが明らかになった。ただし、第6因子、つまり生活環境疎外感の信頼性係数は0.49であり、高いとは言えない。すなわち、この因子を構成する項目をさらに検討し、改善していく必要があると思われる。

疎外感尺度の妥当性について、本研究が述べている疎外感に関する定義、及び理論構想を検討すると、本尺度は例えば、Jessor.R & Jessor.S (1977) によって開発された疎外感尺度と Russell & Cutrona (1988) のUCLA孤独感尺度との間に以下のような相関関係を有するものである。①疎外感全体(EEE)は、Jessor.R & Jessor.Sの疎外感尺度、孤独感尺度との間に、中程度以上の相関が見られるはずである。何故なら、これらの感情は主体と客体の疎遠から生まれる消極的な情緒であるからだ。②具体的に考えると、孤独感尺度と疎外感尺度のE3(孤独感因子)、E5(身内疎外感)、E9(社会孤立感)、EE2(人間関係疎外感因子)との間に見られた相関係数は、E7(圧迫拘束感因子)、E8(無力感因子)、EE1(社会疎外感因子)との間に見られた相関係数、またE2(自我疎外感因子)との間に見られた相関係数、さらにE4(自然疎外感因子)、E6(生活環境疎外感因子)、EE3(環境疎外感因子)との間に見られた相関係数と比較すると、「高い～中程度～やや低い～低い」となっているはずである。この結果は、疎外感には主に身内、友人、集団との人間関係において、また社会孤立感から生まれてくるものであるため、EE2と一番緊密に関連していると考えられる。そしてEE1から、E2、EE3へと徐々に

に弱くなっているはずである。③Jessor.R & Jessor.Sの疎外感尺度は主に人間関係疎外感、及び個体が参加している活動に関する不確定感を測定しており、環境疎外感を含めていない。従って、E4、E6、EE3以外の因子との間に比較的に高い相関が見られるはずである。

表4にまとめている結果は、以上の推測を概ね説明するものとなっている。つまり、孤独感はE2、E4、E6との相関は0.4より低いが、E3、EE1、EE2との相関は0.5より高いのである。またE6との間に有意な相関が見られていない。以上の結果から、本研究で開発された疎外感尺度は高い妥当性を持っていると言える。

また表6の結果から見てみると、男女とも生活環境疎外感因子、圧迫拘束感因子における平均得点は4を超えている。つまり、中国の学生がある程度生活環境疎外感と圧迫拘束感を感じていることは、学生の生活環境は画一的であり、学習のプレッシャーが高いことと関連していると考えられる。また、身内疎外感因子が含まれている人間関係疎外感の得点が低いことが分かった。つまり、身内、及び血縁関係を大事にしている中国文化、伝統(吉、1999)は、青少年に対して大きな影響力を持っていると言えよう。さらに、男子学生は無意義感因子と環境疎外感因子において、得点が比較的に高いことが分かった。この結果については、今後より詳細な考察が期待される。

最後に、表7と表8の結果を見てみると、社会疎外感因子と人間関係疎外感因子では主に学年差と地区差、環境疎外感因子では主に地域差、地区差と性差が見られた。また、圧迫拘束感因子では主に地域差と地区差が見られた。さらに、身内疎外感因子では主に学年差と性差が見られたのである。これらの結果から、中国の青少年が社会疎外感、人間関係疎外感、疎外感全体において示した差は、学年と地区との交互作用に、そして環境疎外感因子において示した差は、性別と地域との相互作用に現れているのである。総合的に見れば、調査対象となった彼らを持っている疎外感の差は、主に学年と地域との交互作用に現れていることが明らかになった。

ここで以下のような興味深いことが分かったのである。まず、社会疎外感に対して主に影響を及ぼしているのは地区と学年という環境要因ならびに年齢という成長要因である。このことから社会環境は社会疎外感を形成する主要な原因であることが明らかになったと言える。次に、人間関係疎外感に対して

影響を及ぼしているのは学年であり、つまり年齢は個体が人間関係を処理することにおいてもっとも影響力の強い要因であることが分かった。年齢の違いによって疎外感がどのように生じるかについては、また今後の課題として考えたい。さらに、環境疎外感に対してもっとも大切な要因は地域と性別である。つまり、環境疎外感を改善する最も有効な方法というのは、個体を取り巻く環境を変えることと言える。また、男性は女性より理性主義的であり、物質、あるいは機械的な生活に適していることが分かった。そして疎外感全体に対して影響を及ぼしている要因は学年であり、年齢は疎外感を生む重要な要因であることが明らかになった。このことは、今後疎外感についてさらに研究を展開していくにあたって、大変重要である。

最後に、図1の結果から青少年疎外感尺度全体、及び社会疎外感因子、人間関係疎外感因子と生活環境疎外感因子の変化状況について検討する。中国西部の青少年の疎外感を中学校、高等学校と大学という3段階に分けて見てみると、中学生が持つ疎外感 は高等学校と大学の学生より低いことが分かった。この結果は、中学生は自己に関する意識がまだ発達していないこと、社会、生活環境と人間関係に関してもまだ十分認識できていないことと関連すると考えられる。

疎外感の発達状況を見てみよう。疎外感 は各段階の始まりと終わりになると、つまり中学校1年目と3年目、高等学校3年目と大学4年目になると、疎外感尺度の得点が一番低く出ているのである。この結果は、青少年は高等学校及び大学において自己に関する意識が発達し、そして安定しつつあることと関連すると思われる(林崇徳、1995)。また、彼らの社会、環境に関する認識は無関心から関心を持ち始めていることや、認識自体は感性から理性に及び一側面から全体に変化していることや、人間関係に関するニーズ及びテクニックが学習されていることなどと関連しているかもしれない。さらに、彼らはちょうど自我同一性の確立段階にあり、人生観と価値観を形成していることも要因の一つと考えられる(黄希庭・徐鳳珠、1987)。生活環境疎外感が大学4年において急速に上がっている結果は、彼らが就職をして社会に出ることで比較的に直接社会生活のプレッシャーに直面していることと関連すると思われる。従って、高等学校と大学は疎外感が生まれやすい重要な時期と言える。この時期において、我々は彼らが客観的な自己概念を形成できるよう、正しい人生

観と価値観を持てるよう、人間関係を上手に処理するテクニックを高められるよう、社会問題を正しく、客観的に分析と認識できるように手助け、彼らが生活、人間関係、社会に対して積極的な態度を持てるように助言していく必要がある。

## VI まとめと今後の課題

本研究は文献研究、及び自由記述形式の調査結果に基づき、疎外感の理論構造について仮説を立てた。その仮説に基づき、青少年疎外感尺度を作成した。予備調査、及び本調査によって、尺度の信頼性と妥当性について検討を行った。主に以下の結果が得られている。①疎外感 は下位概念を持っている多次元な概念である。②本研究によって明らかになった疎外感の理論体系は比較的合理的であり、尺度の信頼性と妥当性が確認された。③中国の青少年は社会疎外感因子、人間関係疎外感因子、疎外感尺度全体では、学年差と地区差、そして環境疎外感因子では、性差と地域差が見られた。

また、本研究は以下のような問題点があり、今後の発展が期待される。

1. 本研究の調査対象となったのは、中国の西南、及び西北の学生に限っているため、結果の普遍性が欠けている。
2. 研究方法が単一である。予備調査においてはインタビューを加えたが、本調査は質問紙法のみを用いている。今度の研究において多様な研究方法を使うことによって、より客観的な、信憑性の高い研究結果が導かれるだろう。
3. 疎外感 は下位概念を持っている多次元な概念であるため、疎外感の下位概念の厳密な定義、及び正確な理論仮説が大変重要となってくる。本研究は疎外感についてある程度深く検討してみたが、その下位概念と理論仮説をさらに吟味し、限定することが必要である。また、疎外感と価値観、問題行為との関連については、アメリカ、及び日本において研究されているが、中国においてその研究が今後期待される。
4. 本研究は疎外感の形成原因、影響される要素、軽減される方法などについて深く検討することを今後の課題としてあげたい。

以上の点から、本研究は中国西部の青少年における疎外感についての初歩的な研究である。この問題については、今後より一層な発展が期待される。

## &lt;付記&gt;

本研究の遂行に関して中国の「国家社会科学基金“汉区少数民族的社会、文化与人际疏离感研究”(No. 03CSH008)」と西南師範大学研究資金援助を受けました。

## 引用・参考文献：

- Abdallah, T. 1997 Reliability and validity of palestinian student alienation scale. *Adolescence*, 32(126), 367-371.
- Anderson, K., Quinney, R (Eds). 2000 *Erich From and critical criminology: Beyond the punitive society*. University of Illinois Press: Champaign, 43-58.
- Boyd, M. R., Mackey, M. C., 2000 Alienation from self and others: The psychosocial problem of rural alcoholic women. *Archives of Psychiatric Nursing*, 14(3), 134-141.
- Daugherty, T. K., Linton, J. M. 2000 Assessment of social Alienation: Psychometric properties of the SACS-R. *Social Behavior & Personality*, 28(4), 323-328.
- DeNiro, D. A. 1995 Perceived alienation in individuals with residual-type schizophrenia *Issues in Mental Health Nursing*, 16(3), 185-200.
- Gardner, R. A. 1998 Recommendations for dealing with parents who induce a parental alienation syndrome in their children. *Journal of Divorce & Remarriage*, 28(3-4), 1-23.
- 黄希庭・徐鳳珠編 1987『大学生心理学』上海人民出版社, 162-222.
- 伊藤裕子・池田政子・川浦康至 1999「既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会活動の影響」『*The Japanese Journal of Psychology*』, 70(1) 17-23.
- Jessor, R., & Jessor, S., 1997 *Problem behavior and psychosocial development*. New York: Academic Press.
- 吉 沅洪 1999「中国人の家族と血縁—儒教の精神を中心とする人間関係についての歴史的概観」『*臨床心理研究*』京都文教大学心理臨床センター紀要創刊号, 117-121.
- 林崇徳編 1995『*発達心理学*』人民教育出版社, 368-396.
- 宮下一博・小林利宣 1981「青年期における疎外感の発達と適応との関係」『*教育心理学研究*』, 29 297-305.
- 宮下一博・小林利宣 1985「疎外感と幼児期の家庭環境及び自己概念との関係」『*広島大学教育学部紀要*』, 33,141-147.
- 宮下一博・上地雄一郎 1984「Loevingerの自己発達理論—信頼性と妥当性の検討及び疎外感との関係」『*広島大学教育学部紀要*』, 32,183-187.
- 宮下一博 1994「大学における疎外感と価値観との関係」『*教育心理学研究*』, 42,201-208.
- Paulson, M. J., Lin, T. T., & Hanssen, C. 1972 Family harmony: An etiologic factor in alienation. *Child develop*, 43,591-603.
- Robinson, J. P., Shaver, P. R., Wrightsman L S (Eds) 1977 楊中芳・王丹宇等訳『*性格と社会心理測定総覧(上)*』遠流出版事業株式会社(台湾), 387-478.
- Rode, A. 1971 Perceptions of parental behavior among alienated adolescents. *Adolescence*. 6,19-38.
- Russell, D. W. & Cutrona, C. E, 1988 Development and evolution of the UCLA loneliness Scale, Unpublished manuscript, Center for Health Services Research, College of Medicine, University of Iowa.
- Schubert, D. S. P & Wagner, M. E, 1975 A subcultural changes of MMPI norms in the 1906s due to adolescent role confusion and glamorization of alienation *J. Abnorm. Psychol*, 84,406-411.
- Southwell, P. L., 1998 Everest, M. J. The electoral consequences of alienation: Nonvoting and protest voting in the 1992 presidential race, *Social Science Journal*, 35(1), 43-51.
- Thomas, T. N., Schare, M. L. 2000 A cross-cultural analysis of alcoholism and social alienation in Panama and the United States, In: Columbus F. *Advances in Psychology Research*. NY: Huntington, 163-174.
- 汪向東 1999『*心理衛生測定評定手引き*』中国心理衛生雜誌出版社(特別版), 286-287.
- Warshak, R. A. 2000 Remarriage as a Trigger of Parental Alienation Syndrome. *American Journal of Family Therapy*, 28(3),229-241.
- Wolfe, R. N. 1976 Trust, anomia, and locus of control: Alienation on U.S. college students in 1964, 1969, and 1974. *J.Soc.Psychol*, 100,151-152.

Wozniak, J. F., 2000 Alienation and crime: lessons from Erich Fromm. Erich Fromm and critical criminology: Beyond the punitive society. Anderson. Kevin & Quinney. Richard (Eds), University of Illinois Press: Champaign, 176.

楊東・吳曉蓉 1998 「大学生疎外感に関する初步的研究」『心理發展と教育』, 14(3), 47-52.

楊東・吳曉蓉 2002 「疎外感に関する研究の發展、及び理論構造」『心理学進展』, 1(10), 71-77.

楊東・張進補 2002 「大学生の疎外感が価値観に与える影響」『西南師範大学紀要』(人文社会科学版), 26(4), 78-83.

張春興 1989 『張氏心理學事典』臺灣: 東華書局印行, 29.

張進輔・張慶林 1988 『当代青年心理学』湖南人民出版社, 384-414.

資料

亲爱的同学:

您好!

我们是西南师范大学心理学院的科研人员, 想通过这份无记名的问卷调查当代大、中学生的心理状况, 您的真实想法和实际情况将为我们的研究提供很大的帮助; 同时, 也为我们进一步做好大、中学生心理素质的培养工作提供可靠的资料。请不要过多的考虑, 想好了就回答, 每道题都要回答, 不要漏答。无记名加上我们的绝对保密, 任何人都无法知道这是谁的答卷, 请不要有任何顾虑。

谢谢您的合作!

西南师范大学心理学院

指導語: 下列语句是人们的一些体会, 对每项描述, 看是否符合您的真实感受, 在数字下面用“○”划出来(数字只是代号, 不表示任何含义)。

举例如下: “我感到人生没有什么意义”

如果你认为完全符合自己现在的感受, 就在“7”下面打“○”, 如果你认为有点符合, 就在“5”上面划“○”, 如果你认为完全不符合现在的感受, 就在“1”上面划“○”。

完全	比较	有点	不确定	有点	比较	完全
				不	不	不
符合	符合	符合		符合	符合	符合
7	6	5	4	3	2	1

青少年学生疏离感及其发展的研究: 附录

答案请写在答卷纸上

- (1) 我感到自己孤独一人。
- (2) 每天紧张的生活使我感到苦闷。
- (3) 我觉得自己和大自然之间有种疏远的感觉。
- (4) 我的思想观念和许多人的思想观念不一致。
- (5) 遇到麻烦时, 我无法依靠他人给予支持和帮助。
- (6) 我时常体会到有种无能为力感。
- (7) 我有一种讨厌自己的嫌弃感。
- (8) 我觉得生活在一个自己不满意的社會中。
- (9) 我感到生活在远离大自然的环境中。
- (10) 我感到周围的人像陌生人一样。
- (11) 我的理想和意愿与现实不一致。
- (12) 我没有空虚的感觉。
- (13) 我对目前的生活感到满意。

- (14) 我喜欢我自己。
- (15) 即使与朋友在一起，我也经常感到孤独寂寞。
- (16) 我经常感到不得不去做自己不想做的事。
- (17) 我感到生活在比较令人满意的社会中。
- (18) 我感到与周围的人很亲近。
- (19) 我感到被什么东西束缚了自由。
- (20) 我对自己持肯定的态度。
- (21) 朝夕万变、世事无常，我不能把握。
- (22) 我感到与亲人之间的感情很亲近。
- (23) 我感到大自然离我的生活环境越来越远了。
- (24) 我感到和他人之间有距离。
- (25) 我感到自己是一个不错的人。
- (26) 我对他人失去了兴趣，而且不关心他们。
- (27) 我有一种被什么东西逼迫的感觉。
- (28) 我感到自己不能溶入到周围的环境中。
- (29) 我总感到自己对许多事情不能控制。
- (30) 我觉得自己的生活缺乏充实感。
- (31) 我总觉得自己是一个失败者。
- (32) 现在的各种思想那么多，我无法确定该信奉那一个。
- (33) 我感到和朋友之间的关系很亲近。
- (34) 总的来说，我对自己感到满意。
- (35) 我时常体会到一种紧张压迫感。
- (36) 我感到自己不能溶入到朋友的圈子中去。
- (37) 我对许多事情感到无能为力。
- (38) 我感觉自己的生活漫无目标。
- (39) 校园昔日的宁静和优美已经离我们远去了。
- (40) 如今的事态变化太快，使我在选择要遵循什么准则时经常遇到困难。
- (41) 我感到自己和自己有疏远的感觉。
- (42) 我感到我的周围缺乏大自然宁静、清新的气息。
- (43) 遇到麻烦时，我无法依靠集体或组织给予道义上的支持和帮助。
- (44) 我感到自己的思想压力很大。
- (45) 我对目前的生活感到不满意。
- (46) 我有使自己的生活环境尽量靠近自然的强烈愿望。
- (47) 我有一种空虚的感觉。
- (48) 我感到和亲人之间有种疏远感。
- (49) 拥挤的人群和喧嚣的环境使我想远离城市。
- (50) 相对来说，我的生活是单调无味的。
- (51) 我有想离开寝室单独居住的强烈愿望。
- (52) 我觉得家人并不像我希望的那样与我亲近。

資料 回答紙

学校：\_\_\_\_\_ 年级：\_\_\_\_\_

科系（班級）：\_\_\_\_\_ 性別：\_\_\_\_\_

你来自什么地区：\_\_\_\_\_（1. 农村；2. 大城市；3. 中小城市；）

	完全符合	比较符合	有点符合	不确定	有点不符合	比较不符合	完全不符合		完全符合	比较符合	有点符合	不确定	有点不符合	比较不符合	完全不符合
(1)	7	6	5	4	3	2	1	(27)	7	6	5	4	3	2	1
(2)	7	6	5	4	3	2	1	(28)	7	6	5	4	3	2	1
(3)	7	6	5	4	3	2	1	(29)	7	6	5	4	3	2	1
(4)	7	6	5	4	3	2	1	(30)	7	6	5	4	3	2	1
(5)	7	6	5	4	3	2	1	(31)	7	6	5	4	3	2	1
(6)	7	6	5	4	3	2	1	(32)	7	6	5	4	3	2	1
(7)	7	6	5	4	3	2	1	(33)	7	6	5	4	3	2	1
(8)	7	6	5	4	3	2	1	(34)	7	6	5	4	3	2	1
(9)	7	6	5	4	3	2	1	(35)	7	6	5	4	3	2	1
(10)	7	6	5	4	3	2	1	(36)	7	6	5	4	3	2	1
(11)	7	6	5	4	3	2	1	(37)	7	6	5	4	3	2	1
(12)	7	6	5	4	3	2	1	(38)	7	6	5	4	3	2	1
(13)	7	6	5	4	3	2	1	(39)	7	6	5	4	3	2	1
(14)	7	6	5	4	3	2	1	(40)	7	6	5	4	3	2	1
(15)	7	6	5	4	3	2	1	(41)	7	6	5	4	3	2	1
(16)	7	6	5	4	3	2	1	(42)	7	6	5	4	3	2	1
(17)	7	6	5	4	3	2	1	(43)	7	6	5	4	3	2	1
(18)	7	6	5	4	3	2	1	(44)	7	6	5	4	3	2	1
(19)	7	6	5	4	3	2	1	(45)	7	6	5	4	3	2	1
(20)	7	6	5	4	3	2	1	(46)	7	6	5	4	3	2	1
(21)	7	6	5	4	3	2	1	(47)	7	6	5	4	3	2	1
(22)	7	6	5	4	3	2	1	(48)	7	6	5	4	3	2	1
(23)	7	6	5	4	3	2	1	(49)	7	6	5	4	3	2	1
(24)	7	6	5	4	3	2	1	(50)	7	6	5	4	3	2	1
(25)	7	6	5	4	3	2	1	(51)	7	6	5	4	3	2	1
(26)	7	6	5	4	3	2	1	(52)	7	6	5	4	3	2	1